

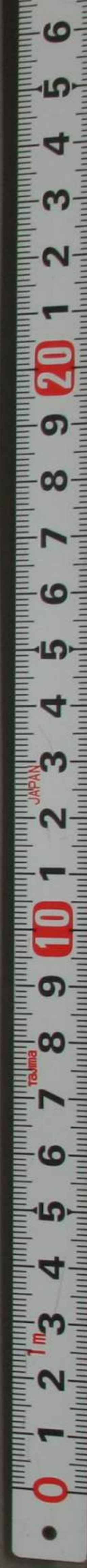


関ヶ原軍記

二編九五

九六

遠 13
2207
28



門へ遠13
 冊2207
 卷28

池清

園ヶ原軍記武編卷之廿五

目錄

- 一 井仔直政 いざなぎ 福嶋正則 ふくしまのり 之 の 所 ところ 事 こと
- 一 井仔直政 いざなぎ 本 ほん 多 おほ 志 こころ 勝 かち 争 まが 輪 りん
- 一 園ヶ原大戦 うのくはらのおおたたかひ 初 はつめ の の 事 こと
- 一 井仔直政 いざなぎ 浮田 うきだ 惣 そう 子 こ 之 の 事 こと

翻譯書 繪本
 倭軍書 曲亭馬琴之作
 唐軍書 其外諸先生作
 隨筆物 軍書
 國々名所 敵討
 近世戦争書類 諸家騷動
 御捌物
 滑替物
 右々外數品は座山守江流に授奉歟也
 東京牛込細工所
 誠光堂 池田屋清吉
 書物價目表所

合戦の事

池清



園ヶ原軍記武編卷之廿五

井伊直政 福崎正則と所と
井伊直政 本多忠勝率編
の事

去程申慶長八年九月十八日
の朝暮明前 井伊直政
備直政と清先年此御軍代

あつたにるはりの武老十騎をう
 けよ志長木保古佐乃子辰至水
 甚外子川 慶濃 安度等と戦
 ぬつれく福島の陣へ廿
 封西しそりりたるの今朝を
 朝露深く教ふ娘あつたを
 色子運ちりて一陣先ん
 るあつた時をぬすこころえりく

以大ゆれりさす干山桑水足
 斗ひ有て能くくゆん
 ゆりりしき色これ極
 よのあゆんきこの級を正則
 腹立させく一際きり
 りくさくさすさすの軍陣あ
 らん福島出陣をすく大ひあ
 怒り井坪どの干れ此正則戦

嘉年あきとしのあきとし思おもひひややははたたるるの
ちちままをを不ふ得とく老らう乃の初はつめめととややととん
うう四し十じゅう文ぶん小せう解かいりり多たりり又また軍ぐん切きり
殺ころすすのの致いたすすひひとと急いそぎぎをを巻まききてて軍
ららのの訓しんをを去されれをを

内うち府ふ公こう乃の御ご先せん越え仕しるるややどどの
正ただ刻とき井い俾し度たのの内うち尾び介け干かんのの報あやるる
るる致いたすすひひとと急いそぎぎをを巻まききてて軍

の御ご先せん越え仕しるるややどどの
致いたすすひひとと急いそぎぎをを巻まききてて軍
ららのの訓しんをを去されれをを
内うち府ふ公こう乃の御ご先せん越え仕しるるややどどの
正ただ刻とき井い俾し度たのの内うち尾び介け干かんのの報あやるる
るる致いたすすひひとと急いそぎぎをを巻まききてて軍

くろくしきさるるなり成武者
幸騎幸来るに幸提命と見え
く十騎をくり續ひたり車政
不思候り名ひ定めて味有る
なりきり候人そと尋ねるに本
多中督太捕ありと言ふ車政
吹くくし候や名捕そでんり
南文山多藤口の押しありて

後陣の御軍代より成子細り
仍て先陣の御軍代先陣
御軍代は此車政とありたり
時り名捕そんよ名へく先陣
も後陣もひりたり
のたくりひもとて晴無双の合戦
ありて一をん合戦あり
は本多あり朝雲はち物見

年おこりて大言りやあか
直政つて大いおどろか先
陣の御軍紋も某々之本多度
率忽の軍は
いれは時名勝戦場も君命
ごまを月ひざら車取り敵
の至命と重んずる車金石の
如くありそ度あんどごま習

なまや弓矢八幡を思強あれ
圓東物虫の内よもは名勝が陰
さうだり向あそののあ
と大言とをあるつ直政も大い小
怒りつてくま名勝のさう
君乃御高とねりあすのおる
れりるりそ敵もあわく
此直政が強さうだり揺るん者

うきさるゆりあり何とてあ人編
に及むんや今日の大更くとも
あふがゆん部のごとく此仕合せ
あり世後の致しむる部控あ
大名うちり一書檢取せむる時
徳川家安免の致し
ふ他家致しおきて仕りとも
きんまゝの永代部控の大名等

鼻ふ掛へさるりおまひり一書
合戦つけ井伴本多れ内よそ
さるりともあ人うち知ひく列
きりりそのま集りごうく果
き書合戦致しめり井伴重
政あり又物の手一書合戦のあ
た孫也まのまのまのまのま
日の義勇を是必本朝ともあ

弓矢希むれ人くあり
御當家安危の合致り此
人く一ざん檢をば安しと
の心慮後代を 御當家の
三傑あり花もは美人く柳宗
如く三傑あり邦人の如く
とこありや
或は曰く井伴 本多此

幸得既事精貞千及げん
中より麻雲山城を通り
是りておどろけたる事
弓矢絶隔より今西好の
其福を勿疎るに此
君の爲大切の事あり
我くぞん小士との遠ひ
持来あぐりと持く是

城中せしつり子連和熟も

りり

冥ヶ原大会戦の事

并井伴重政 浮田とさき青合

戦の事

曰く退く勢を略れ東西の軍
を討つとあけ并伴重政も

さき妻小陰をむむ福崇大の

事りりて無陣よおしうけて

お戦ふくさるゑが軍つるく

して福徳野退く十町斗り

退きりりこの時正刻大の事

りりて頼りに下知し各士戦

をめて退く一攻戦し福徳

が京来吉村又右衛門下思文就

大崎香薷 冥石見 長尾集人
お武骨と長尾の浮田が大军
も福崎勢と喰ひあつて部の
働まる 依く福崎が戦功大
ひり 勝色りり 及小福島の家
人列下氏部 各野の大能病
りのそ 福崎家の家を少して
お政ありりの若乃 危うきと正則

助けあはせしありとれさうひ
室中此時也子の折崎左近
各とをわて石田が先陣と勤
めをいさしひ 強骨として
尚う 仍て冥東がこの
先手 敵水せり

井原直政と折原深く働
く 子子の是徳之結り

又鉄のひりあらし存にるま
のさくらう徳育とさくらひ鉄
うのせんらるる土地の案内
が無くても池堀沼水の題
候もあまきまとして音井む
の百姓を人鉄頼むこれき
前方南地へ出活の節中
むさうふ車政一人木俣候

連民間へ入る利益候る中
年の男鉄頼む我地度乃
頼むひらる徳方にもなるも急
土地の案内を知りてい叶
りど汝ぢの此辺二三里の夏
鉄志る好む心備へて頼む
あり左もればは車政が手
と候り又
徳川家

警昌ありてまじり思堂の
後知り報録も又ま
重銀米錢ももま重ま
まうすべしといふもの者
是をいひて近頃眞實あり
殿うれ私淑もえ来武衆れ重
まあり只友人の親一生の
内安樂く言ふま親の重銀

城下よりいふ所を案おのん
ト又いふ高実感トぬれ私
が一命も捨て道乃西案内
まば仕えまといふま重政
此陣中に有てまの及二三
里のあつていふま重
まより候てま部お痛が十又
日此戦うまの結方(延上り

く戦ふは弱きとせしむ
御籠本の危きと助け
兵卒砂を走らむとせしむ
ふふ井俣を案内致す
故之をさすみさる人もあり
夫より急ぶ軍法も疎者乃
らひびの佐る本三府盛綱
を及すの先陣平も案内

者より有るり又唐土韓信が
九里山埋伏の軍法も甚其
古地致知する人な年なり
利をゆんやけを能く急
出より後より恥を去る人の
下より急して功を百人の
ふふ急するといふ語なり
人或は親戚持する人を

そ主一人は仕くる時秋所
此袖を思ふべし一向
仕へるべその志百人のよ
ありされば人々年を
人平仕へく是尺千の
うりふ人乃あふ袖
とひくたその中とたるみ
きる時又百人乃よふ

必一人の前めをもち
おりのをさすは或ひ一文
字の無文字は師といひ知ら
ざる事袖は捨く人
習ふを 袖は捨く人
とふを一人のまは袖
てあつる時一生が
知るて袖をく

を師通き人千の如く
仕ての袖るれ其甚疾なる
時多あ人あし千の如
お揃く同あ一交れをぢ
官りるの一部の袖とら
世活も云ありつとこれ
あり一人の手に袖成居そ
其功必は百人の一人可

立あがり

初く交長又年九月十八日辰
の事刻あするの如く
山々を雲漸く晴て敵味方の
籠了す一娘あきあんもの時
四甲四方にあのふの甚艦の目を
りりする如くその款するは
軍勢並居たりこの時福徳正

別四方と急度足後より秋備へ
りり入下うたも押出して
陣邦と備へ赤地平八幡大菩薩
を去るる籠を押し立井伴直政
を去らん平河りり入るる虚
を藤山内林麓より野上村
の河のふし軍兵を張して七本
は白籠籠とくして足らん籠

も是方と一回り勢破や
内府公は河出馬あつりさどよ
めく声の響り籠より足力
少 河名が河の河りさどひあり
此部河河秀部は武万金蹄と
実ヶ原の海原第一とん平
押いざん又石田勝清 小西
大谷等を
内府公の

御籠先^{みかき}見^みらると急^{きん}度^と居^いまり
教^{しゆ}へしを備^{そな}へたりこの時^{とき}実^ま東方^{とうほう}
を一回^{いちかい}千^{せん}貝^{かい}を敲^{たた}ち鳴^なり
國^{くに}の聲^{こゑ}と合^あせ都^{みやこ}々^々款^{くわん}味^みり
二十^{にじゅう}七^{しち}万^{まん}余^よ人^{にん}一回^{いちかい}千^{せん}發^{はつ}聲^{せう}せらる
るる^{るる}れ^れば^ばお^おび^びこ^こら^らく^く時^{とき}方^{かた}也^{なり}
は時^{とき}法^{ほつ}見^{けん}物^{ぶつ}の^の人^{にん}國^{くに}東^{とう}方^{ほう}北^{きた}山^{さん}筋^{すぢ}
る^るむ^むぐ^ぐと^とむ^むぬ^ぬき^きし^し物^{ぶつ}の^の方^{かた}

北^{きた}山^{さん}の^の西^{せい}と^と最^{さい}負^ふも^も凡^{ぼん}そ^そ教^{しゆ}へし
の^のせ^せり^りの^の見^{けん}物^{ぶつ}お^おび^びこ^こら^らく^く
ある^{ある}復^{たがひ}る^るり^り子^こ卯^うき^きの^の合^あ戦^{せん}
ある^{ある}時^{とき}近^{ちか}東^{とう}村^{むら}々^々在^あり^り北^{きた}百^{ひゃく}姓^{せい}
或^{ある}ひ^ひの^の地^ち下^げ人^{にん}又^{また}き^きぬ^ぬき^き老^{らう}若^{じやく}共^{ども}
々^々あ^あく^く々^々山^{さん}あ^あり^りの^の軍^{ぐん}々^々
の^の君^{きみ}々^々集^{あつ}む^むる^る方^{かた}集^{あつ}む^むり
て^て見^{けん}物^{ぶつ}を^をら^らに^に負^おく^く方^{かた}所^{ところ}人^{にん}

と取りて遊多時を乱妨す
物多しる事名も候あり又
一百万人毛人数の抑けり時
の先りさうたへ高人も大勢
あつたり来り別く不自由なる
事あり一叔國の声終ると言
はんよ井伴会部少捕乃先手
木候古佐とや浮田勢之軍

戦仕裁多秀家此軍將明石掃
部外 務多等木候とたうり
是と書りて中軍此処に
井伴直政押をく是候と心て
候り小銃炮此合は是左様
のま書合裁井伴直政事終れ
あり木候古佐と書りて
随分静まる人あられ今日の

致し平の大人平常を
く鎧掛入をりく下知
りらゆ平井輝家の先陣平
進んがらありの者戸田惣左衛門
八回金十席 伴左衛門 頼家
山村お城始めとしてるとのり
きてく鎧をみく常をる
お終く起しくと鎧を合せ

くき妻さよば唐平助在場つが
手にあり又一番鎧を八回金十席
合せより物として軍の仕指を
き妻よ是輕き鎧掛入らり
のち長柄を認りてせり其つが
よの武者をんで志中を一妻
鎧掛合せんと起しくとあ方
合ふこの時双方をゆんでその

一 場雨と取りまゝに名鑑らまゝにす
あり井俾が先陳木候古依庵
原助心集の 乃原石主名板無許
千禮と入まゝに中軍此勢と
執心と交へて候も或三下虎
口と追のけくたう心とけり
せんといふ井俾直政と名あり一
分のさゝらまゝとらゝらゝら

一 裁ま只今日此合戦とのまじく
をまゝに居らるゆへ自分此籠本
或千余騎此志丸千とありて
赤籠了る市と押して藤園と
あけて後前秀聚此後一城志手
小見まゝに宮ヶ原御殿一文章に
押出御道此押切く籠
城と双音此合戦と見合はる

実や武伎度重しく流石
相見一し分是よりなりく
備ありりり
徳川家に執持権あり

池清

実ヶ系軍記一篇是の市又終
池清

池清

関ヶ原軍記武篇卷之廿六

目録

- 一 淳田辨 福嶋野と執率の変
- 一 并福嶋方一ト反敗走の事
- 一 福嶋が京を別而民部経病の変
- 一 并別所がた義後に形りる事

池清

関ヶ原軍記式編卷之廿六

浮田秀家 福嶋正則 争戦の妻
并吉村又在場の別當三仍て福嶋
方是毎戦出立事

安子 福嶋友事の妻 正則を八子
余騎の軍令 出押りて
井俣出政がもつて 記を見く

我よりしが大の千のしは我先手
よ有那が二もん手取りより
とていささもり手取りし陰を
入るく切りくづせと先陣後陣
らゝ合てとて一人がけよむら
ぐらよ取りくあつら前
福鴻が物見大別乃言し親父に
法帝 表劫ヶ由 奥平夜之集

おうちつきて榎合よりあり
いざな浮田が衆長乾次所を衆
沢村小十席おけいごして
槍を合しよぞ福島をいりく
いさそそちんいんぼくお
中ぐれとちきりし下急して
おしりく浮田秀衆を急く
福清正別を造恨あり又大軍

しして東一のさだなりさんを
井伊直政のさるくゝる目毛掛
む福崎勢と精效をけつむ
を記るゝと足合せぬゝるゆゑ
正則のいゝく下知して志士
お錢を組合せんとさるゝはく
淳田が先んぬ石掃部を介
信長内通等下知して一時

てのりゝとちけしゝるを
そ音たぬが板屋根手敷の
跡がぶとくるゝり福崎勢を
るがゝにさうて楠竹束を
ゆゝばうゝさん
おまゝのちさるゝるゆゝ雑人
とまゝの跡をさるゝる人の後
とさうて敵軍れりちるまゝり

この時を足さ申して浮田考
森下知政あり惣軍抑り
つゝ切依せしと宗統をもち
あつこんりつて明名掃部
稲葉内通 淡香彦左衛門 膳
洞富田廊本志と記す
で武義余人 藤波の急次揚
りやりと入るより福崎が

人尾実石見 吉村又右衛門 祖
父江法無木下知してをぬり
とお殿と入るあり
浮田が軍士 羽山久内 淡香
彦左衛門 淡井と九郎 木下
平右衛門 等志と記す
と遊りける事と記す
後 浮田は山と記す

とあが退^{あひ}靡^{まひ}けられく右^{みぎ}性^{せい}
左^{ひだり}性^{せい}も彼^か走^ま走^まはるるち持^{もち}たさ
る志^しありし毛^け引^ひ志^しありぞ記^き記^き
年^{とし}逝^や走^まりしはで平^{へい}宮^{みや}ヶ原^{がはら}山^{やま}
向^{むか}及^{およ}まきどまき七八^{しちぱち}下^{した}りど退^{たい}
つめらるるせし小^{せう}雅^{みや}とも知^し
志^し真^ま意^いなり程^{ほど}ひと志^したる武^ぶ
者^{もの}き終^は走^まり来^きりて福^{ふく}嶋^{じま}が

籍^{せき}を一つん引^ひきて敵^{てき}の方^{かた}へ
まきまきしや款^{くわん}籍^{せき}
を大^{だい}集^{しゅう}りれありはとたさ
うれと大将^{だいしょう}正^{せい}則^{すなは}齒^{くは}切^ぎりまら肉^{にく}
りりの武^ぶ者^{もの}もまきまき
まきまきりまきまき
まきまきりまきまき
まきまきりまきまき
まきまきりまきまき
まきまきりまきまき

鑓を引さげくたつ今や
不とりて追来る敵無事
ともせださちむらひさちり
さぬい虎乃風りうさくら
如くあり申あつて大おん
あげ福島の赤人吉村又左場
このとらちり千り續けく
と峰目ら付らうへさちりささ

おん千りけむらめん
の可児才勝 尾園石見 赤劫
解由大勝 玄菟 福崎佐助
日向丹後赤村とおとのり
七騎あつて鑓をむねりて
追来る敵をさちりては福崎
が手に七本鑓といふを赤劫又
左場をさちりて二三十

人これ千つづいて餘を合せ
たり實を武常れのたあり
是をいへ千福鴻が音福吉村
が武常にものあり正刻の
これを見く大の千のあはび
軍士越身てまらや若ども
あの七人千ありびく討ふ
せよと急越越下知しけ

是を候会どりのそのあは
欠来りてまらひらる物
浮田が軍をわらひ
小幣と足くまん申さそり
込め御らんそそらん
軍をうらありく討つ討を
つらうひら七人あひの
たも堀石く手と有ひ是う記

せりきよみげしころ軍勢た
疎くばり事ゆりて又秀家の
軍勢と追居りしこの場所
まきく強来りこの所を又浮田
の軍士清孝と志と 中多三
浮田山久内 陣岡志四郎等
お戦ふうち千福勝正刻
四方とのりて下知を結

戦ふの言天地千むぐ泥美叫ヤマキ
び此言の大地を裂く浮田は二万
の勢と福一毎が八千余人と此
大戦ふのいづをうべまとも足
ざりけり浮田秀家を討つびの
合戦千の是飛揚利と好む
と新母しおのりしに福勝
勢より管員らまきしゆり終り

冥^{くら}東^{とう}がさう大^{だい}のひ子^こ孫^{そん}利^りを博^{はく}
らんとりめりとも福^{ふく}鴻^{こう}ちこの
伎^ぎを初^{はつ}うんしてをさうしたる
ちく東^{とう}一^{いつ}の功^{こう}といぬりたり

福^{ふく}鴻^{こう}が赤^{あか}長^{なが}利^り西^{せい}氏^し部^ぶ能^{ねい}病^{びやう}の

并^{びやう}利^り不^ふが志^し長^{なが}後^ご一^{いつ}初^{はつ}りりす

友^{とも}平^{へい}やうこの世^よの世^よ福^{ふく}鴻^{こう}東^{とう}を
東^{とう}一^{いつ}の出^で現^{げん}人^{にん}利^り新^{しん}氏^し部^ぶととい
ふものといらう能^{ねい}病^{びやう}を始^{はじめ}終^{おひ}
りこのといび毎^{まい}り一^{いつ}交^{こう}の手^て
がうもぬく正^{せい}則^{じつ}をいらう
と中^{ちゆう}さん色^{しき}ども通^{つう}をん不^ふ思^し
候^{こう}の能^{ねい}病^{びやう}のといり
正^{せい}利^りをえ来^{らい}大^{だい}當^{たう}れ大^{だい}荒^{あう}をの

るんを能病ののりきうひるり
亦其外の老長たきこれく
寵堯の膏土るりきうの平
この別所氏部を日けて正
則のききい入るり是の人
去りて城りどみる事あり
それ人平のおはといれ其あり
常此人とも部ののごらく

おはの行中もそもるふ合の之
中い合ぶらに各理をいりて
耳平送あるりこのさび
合款のこのとり別所氏部を
主人正則の馬れきよ平今朝
うりあつらとらうよ流る烈心
しき歎うひ急りて時方
級軍せんとすらゆ急民部を

迎んとおのりやう〜おきて
るらり落さうらう〜くまやま
ちうおくその新れ畑の申へ
送へうて坂ごうけやぬり
うりけ老つ〜く〜く〜く
鬼神のごう〜く〜く〜く
うり〜うり〜うり〜うり
辰あが〜く〜く〜く
下兜 尾実

等が御身をもりて居〜うり
〜く〜く〜く〜く〜く
出毛中〜く〜く〜く〜く
正剣糸来り〜く〜く〜く
らん〜く〜く〜く〜く
ちう〜く〜く〜く〜く
立〜く〜く〜く〜く
都毛泥〜く〜く〜く〜く

予あうまふ今い正則をうび
うけたり福勝を急度見くお
笑ひ信章此毒子あり油ぢら
目頃の能病おそりうんこの
能手名身へ——こそ石室を出
し門ぢりあせく能く見せ
ばもあひも西毛派うけけ
るうく見著——んば正則不便

まやおのりんらんぢらこの
も程うくの朋友同役たよ對面
も有りがさかかん志か
此とそあう相侍へ——こそく
中りとむねりてうぬけさせ
敵中う入く飛虎の境首と
とつくゆきのところあよきあ
是其首の血状るく顔あ

手是ふそぬりつけ終おきして
ふのくびとつうふ民部たみべきこの
きとゆらうく合戦あつせんの物日ものひの戦
まらち居いたりきでふ徳とくをうけ
たうくひ一時いちじに早はやりて申まをの
刻ときにゆり浮田うきだが軍勢ぐんせい越こ水みづ
し福崎ふくさきを去いて氏うぢを
たうくひ居いたりとてうら一ひと氏部うぢべ

ふかのきとゆらうで徳人とくじんの
前まへにそ我われおらんまら終つひらち此
をうく死し仕しりたりとて吉村きちむら
不ふ思し大崎おほさきおの大人おとなきうりら終つひらち
お役おやくの衆しゆ老らうのきありたう
ゆ手てがうもるき戦せん氣きの毒どくく
せんせうとてうらそふ一ひとせんれ
事ことありたりとて時尾ときお園えんのこら

あゝ〜く程病みのけがるよ
ぶぢもろは出さんさ思ひあが
もろおや別所どのそのおん
御ごまいらづきのところあよとや
うけつちあり〜とるねん
バ民部を返へ言ことまさ〜つあり
あもるのら芦あし烟かえりを仕つかゆと隠かくも
居いらるとろあとりふらまゆり

うろ〜ののあり福〜ぬる
い〜言ことた毒どくを御ごりとも
是こゝ遊あそびあをんその時大勢
目め〜ひ御ご〜の首くびを切きらさん
てあふとも是こゝ来きあ〜と
手て時とき別わか所ところを〜付つ首くびは
りろ〜手て遊あそび〜とむが是
よ由よし大だい將しょう正せい則よく公こうの由よし手てが〜之

志^まら^しと^し拜^ま願^い仕^まさ^る首^ああり
笑^わひ^の孫^あれ^とい^ふ子^ご正^し則^も
あ^まり^の事^{こと}に^おけ^れ果^はる^斗
あり^の孫^あり^の其^のち^え松^の六^年
福^く鴻^{こう}家^かの^絶て^酒井^の友^の事^つ
厨^くは^御新^のや^あり^には^等
武^ぶ骨^のは^下の^ま人^も正^し則^も
附^つ志^まら^しの^別名^のま^りの^ま

徳^{とく}氣^き制^{せい}の^主人^の正^し則^もは^仕ま^さる^まの^ま
前^ま目^のの^事公^のま^のの^徳病^のの^の
一^の人^のの^時ま^の人^とま^のま^の
弓^の友^のの^形り^又其^の官^のの^お口^も
縁^の子^のま^のま^のま^の後^の孫^の正^し則^も
元^の後^のま^の出^の家^のま^の永^くま^のま^の
の^不ご^のの^決吊^のま^のま^のま^のま^の塔^の
後^のの^物信^のり^の新^のま^のま^のま^の時^のま^のま^の

東 京 書 林	近世 小説	相州 奇談	開明 小説	近世 小説
	鳴田一郎實録 五十二	真土村實録 全	三田五人切實記 冊五十	紀文實録 冊二十
	堀田先生編 造化色論 全	松村春輔著 三府藤栗毛 三編 大尾	春色先生編 世界大機 全	春風日記 全
	於百 實傳 妖怪物語 百十冊 大尾	活經のくまり 慶女香	誠光堂述	文永堂 大嶋屋傳右工門 誠光堂 池田屋利三郎 盛弘堂 池田屋清吉

京橋弥生三門町
牛込細工町
同

冥々原軍記二編巻の亦六段
池清

あうり
池清
浮田 福崎合致
石田 治中
お備が
池清

